

エキニシ
Ekinishi
ミライ

駅西のカルチャーって何だろうか？

エキニシ
ミライ

The current study aimed to explore the ways in which the community in the western area of Nagoya Station both resist and accept linear development. Renovation businesses in the area's shopping street are conceptualized as "entrepreneurial movements" that counters linear development by using neoliberal national interventions of deregulation, liberalization and privatization. This movement is positioned as "grassroots neoliberalism".

Ekinishi

エキニシの夜明け前

Before dawn of ekinishi




2019年5月1日。令和時代の幕が明けたその日、名古屋駅西の一角に、小さな空間が誕生した。空間は、決して無機質な物体ではない。それは、そのエリアの社会構造のなかに埋め込まれた集団や個人が絡み合いながら、時に衝突しながら生まれる社会空間である。その社会空間は、いかなる人びとの営為や想いの産物なのだろうか。

この小誌は、その社会空間が生み出される過程を記録したものである。エキニシノミライは、そこにどのように映し出されるのだろうか。



再開発を見上げる街

Town looking up at redevelopment

A nighttime photograph of a city street. In the center, a tall, modern skyscraper is brightly lit, with its windows glowing. To its right is a cylindrical building with a grid-like facade. The surrounding area is filled with older, multi-story buildings, some of which have illuminated signs. Streetlights cast a warm glow, and a red light trail is visible in the foreground. The overall scene depicts a city undergoing redevelopment.

再開発を見上げる街

Town looking up at redevelopment

「都市再生」政策へ

Urban regeneration



名古屋駅周辺の大規模再開発事業

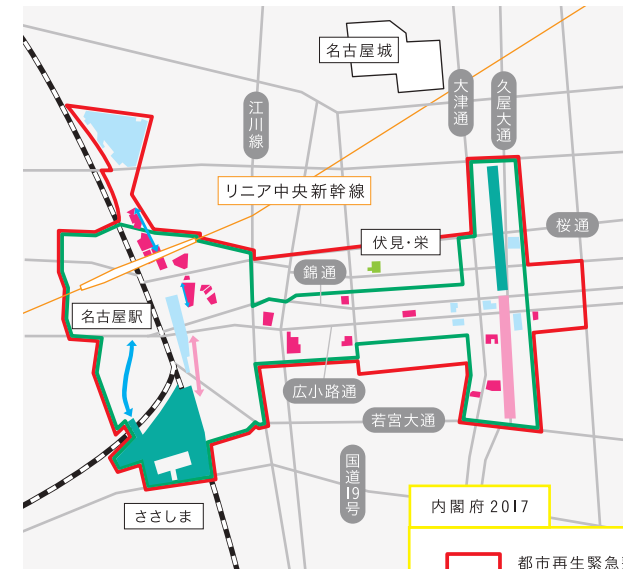
- 1999年 JR東海「JRセントラルタワーズ」竣工
- 2006年 トヨタ自動車・毎日新聞社・東和不動産「ミッドランドスクエア」
- 2007年 「名古屋ルーセントタワー」
- 2015年 三菱地所「大名古屋ビルヂング」、日本郵便「JPタワー名古屋」
- 2017年 JR東海「JRゲートタワー」

民間資本の活用による「都市再生」政策は、バブル崩壊による不良債権処理の切り札とされた。2001年、都市再生本部が設置される。2002年、民間開発業者からの提案を踏まえ、「都市再生緊急整備地域」を指定していった。それは、「都市開発事業などにより、緊急かつ重点的に市街地整備を推進し、都市再生の拠点となるべく地域」である。このエリアでは、建物の容積率規制が緩和され、民間企業は税制緩和や金融支援を受けられる。これらの開発は、国家・民間資本の連合による新自由主義的空間の創出である。

名古屋市では、名古屋駅と栄を結ぶ二核一軸が「都市再生緊急整備地域」に指定され、民営化したJR東海の駅ビルを嚆矢に、次々と超高層の商業・業務ビルが竣工された。こうして、名古屋都心にも、新自由主義的空間が埋め込まれていった。

「都市再生」政策+リニア開発政策

Urban regeneration + Linear development



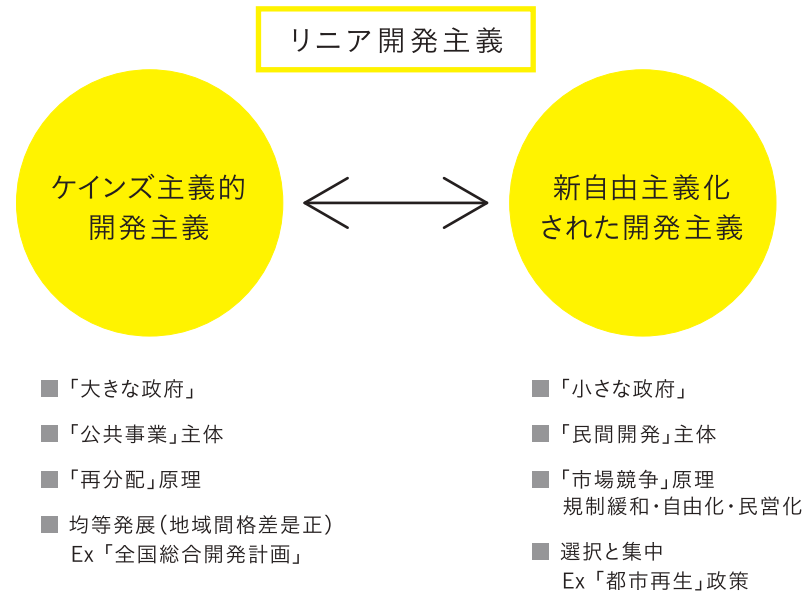
- 1999年 JRセントラルタワーズ
- 2001年 都市再生特別措置法
- 2014年 リニア事業認可

- 内閣府 2017
- 都市再生緊急整備地域
 - 特定都市生成緊急整備地域
 - 都市開発事業(未着手)
 - 都市発事業(募集中)
 - 公共施設整備(完了)
 - 公共施設整備(未着手)
 - 公共施設整備(募集中)
 - 公共施設整備(完了)

これに加え、2014年、JR東海のリニア計画が認可され、リニア開発が本格化する。2027年、東京ー名古屋間を40分で、2037年、東京ー大阪間を67分で結ぶ。このリニア新幹線を活用し、国土交通省や財界は「スーパー・メガリージョン」構想という国土開発方針を打ち出した。この構想では、東京・名古屋・大阪を連結させた巨大な大都市圏の創出が目指される。それは、まさに「選択と集中」によって、大都市の「経済成長のエンジン」を生み出そうとする。リニア開発とは、東京・名古屋・大阪都心の「新自由主義的空間」をリニアというインフラで連結させる試みである。

「開発主義」の振り子

Developmentalist pendulum



開発主義とは「国家を単位としつつ、成長志向という目的のため、政府による市場介入を容認する政治経済的なシステム」(町村 2018)である。

「ケインズ主義的開発主義」とは、大きな政府が公共事業によって富を再分配し、均等発展を目指す。一方、「新自由主義化された開発主義」は、小さな政府が民間主体の開発を喚起し、市場競争原理にもとづいて、選択と集中をもたらす。

リニア開発主義は、ケインズ主義的開発主義なのか、新自由主義化された開発主義なのか、その混合か、全くの新種か？リニア開発主義は、名古屋駅周辺にどのようなインパクトを及ぼすのか？ これらが、今後検討すべき課題である。

リニアが貫通する街、駅西

City through which linears pass



再開発の最前線である名古屋駅周辺は、名古屋の「東西格差」の象徴である。名古屋駅東側地区では東京資本やトヨタ系企業による大規模再開発が進む一方、西側地区は戦後闇市の雰囲気を残した低層地区が広がる。駅西は、名古屋都心に取り込まれようとしているインナーシティである。

駅西地区は「リニアが貫通する街」でもある。駅西銀座通商店街の地下にリニア新幹線が通る。椿町の地下に造成されるリニア駅の地上部分は「リニア駅上部空間」として再開発される。そのため、椿町では名古屋市役所の外郭団体「名古屋まちづくり公社」による用地買収が行われている。リニア開通を契機に「名古屋駅開業から130年間『駅裏』だった駅西の本格開発」が始まろうとしている。

野田清太郎氏 @風琴

Seitaro noda @ fukin



中村区大門出身の野田清太郎氏は 1968 年生まれ。2017 年に駅西銀座通商店街で「鶏ひつまぶし風琴」をオープンさせた。

「大門も悲惨ですけど、椿町も道まで。東京とかほかの都市を見ても、こんなに駅（周辺）がさびれているのって逆に珍しいですよ」。

「廃れてから 30 年という長すぎる年数の中で、『おいしいものが食べられない』っていうイメージが勝手についてしまっていた。『駅西なんか行っても、何もない』っていうイメージを覆したくて、ぼくは、あえてここにお店を出した。」

「例えば東京。六本木ヒルズ作って、ミッドタウン作って、たとえば表参道ヒルズ作って…。どんどん移り変わっているだけですよね。今度は丸ビルまた新しくしてとか。ヒカリエできて。もう、ただ移動しているだけっていう。訴えかけるものって何もないですよ。全部一緒なので。」「劣化する、壊すというよりも、県や市が、いいところを残す、活用していく、『温故知新』。そのようにすれば、駅東とは違う形で、名古屋市の名所になると思う」。

2018年、名古屋市市民経済局 「商店街商業機能再生モデル事業」

City through which linears pass



商店街の衰退と膠着状態に目を付けたのが、30代から40代の若手の起業家たちであった。彼ら彼女らは、2010年代ごろから遊休不動産をリノベーションし、飲食店を開業していく。

名古屋市行政も、こうしたリノベーション事業を後押しする動きをとっている。2018年、名古屋市市民経済局地域商業課は、「商店街商業機能再生モデル事業」を実施した。商店街の空き物件をリノベーションし、活性化のきっかけとなりうる店舗をオープンさせることを目指す。そのために、店舗の事業プランを作成するワークショップを実施した。商店街など地元の人に加え、建築士やデザイナー、まちづくりの専門家など外部人材を交えたチームでこのワークショップは行われた。

事業の中心を担うことになったのが、駅西を拠点とする福祉NPO法人「オレンジの会」の山田孝介氏・真理子氏と「グローバルカフェ」の市野将行氏である。オレンジの会の家族会と市野氏の経営する会社が、地元の不動産オーナー（家主）から物件を賃貸借している。名古屋市からリノベーション事業費に対して、補助金が投じられているというスキームである。

喫茶モーニングメンバー

Cafe morning members



■ ランダムネス 市野 将行 ■ 設計士 栗本 真彦 ■ オレンジの会 山田 真理子 ■ 大ナゴヤ大学 大野 嵩明



「喫茶モーニング」は、駅西で「グローカルカフェ」を経営する市野氏が手掛ける新たな喫茶店であり、ひきこもりの方々を支援する山田氏が所属する「オレンジの会」の就労支援施設でもある。「モーニング」の運営には、この店舗でイベントを企画する「大ナゴヤ大学」の大野嵩明氏も参画している。リノベーション物件の設計を担当したのは、「栗本設計所」の栗本真彦氏である。

2019.3.2 エキニシノミライ @中村区役所

Future of ekinishi @ nakamura ward office



- 1 開催趣旨（林浩一郎）
- 2 駅西カルチャーの過去・現在・未来（名古屋市立大学 人文社会学部 2年生）
- 3 カルチャーはどのようにして生まれるか？（大野嵩明 / 大ナゴヤ大学）

第1部 駅西カルチャーを紐解く：
堀江浩彰 / 野田清太郎 / 市野将行

第2部 駅西の新たなカルチャー拠点“喫茶モーニング”：
山田真理子 / 市野将行 / 栗本真彦

第3部 駅西カルチャーの可能性を探る：
武部 敬俊 / LIVERARY編集部 /
山田高広 / 株式会社三河家守舎 代表、森、道、市場な人

2019年3月2日、これまで駅西で活動してきたメンバーが一堂に会した。名古屋駅西。ここは多様な人びとが、それぞれの独自のカルチャーや雰囲気を書き換え、時に無関心に、時に匿名的に、時に刺激し合いながら時代を刻む「インターカルチュラルな街」だ。リニア中央新幹線の開業が迫る「駅西」で、これから何が起き、どんなムーブメントが生まれる可能性があるのか？カルチャーの担い手を招いて街の現状を分析し、「エキニシノミライ」を語り合った。

山田真理子氏@オレンジの会

Mariko Yamada @ orange meeting



このモデル事業において、競争率の高いこの商店街の空き物件を調達したのはNPO法人オレンジの会を運営する山田孝介氏・真理子氏夫妻である。オレンジの会は、ひきこもり状態にある人びとに対する自立支援を行っている団体である。2000年に、真理子氏の母が発足。真理子氏は、1985年に中川区の豊成団地に生まれ、小学5年生の頃に中村区へと引っ越し、そこで育った。今は駅西に住まいを持つ。

「20年ほど駅裏の中村区に住んで見ていたので、知っている街がどんどん変わるのには寂しいです。東京等で流行っている店が駅周辺に出来るけど、都市部にはない魅力があるから、一緒にしないでいいのって思います。

生活者としての自分は、ものすごい活性化を積極的に望んでいない。あまり人が多すぎてあんまりお洒落で機能的すぎる、駅西っぽくない街になると住みにくい。日曜日にすっぴんで出かけられる街の良さも残っていてほしい」。

「自由に動きながら、町を開拓しながら、活動を広く周知されていけたらいいな。仕事というよりは、NPOって市民活動という側面もある。そちらの活動も大事にしていきたいと思ったので、今回の名古屋市商店街機能再生モデル事業に応募しました」。

栗本真吉氏@栗本設計所

Shinichi Kurimoto @ kurimoto design office



ワークショップの様々なアイデアを物件に落とし込んだのは、1976年一宮市出身の栗本氏だった。あいちトリエンナーレのアーキテクトでもある栗本氏も、ワークショップ参加者の一人であった。

「建築家というと、何かやけに格好良い建築つくっちゃうぞとか。『格好いいんだけど、使いづらいな』みたいなことだとか。僕が考えているのは、やっぱり『幸せな空間』をつくるということが、すごく大切なんじゃないかなと思っています。『幸せな空間』とは、どういう空間か』と考えると、なかなか『これだ』というのは出てこないんですけど。逆に、『不幸な空間』というのは明確に言えるなと思っています。それは、『人がいない空間』だと思うんです。人がいない建物というのは、まったく意味がないです。人が使いづらいと思うような空間だとか、建物というのは、非常に不幸な状況になりかねない。

僕自身は、デザイン性だとかそういったことよりは、ちゃんとそこに人が集まったり、人がちゃんといるという、人が使うということを目指すように考えています。その建物というのは、色んな人たちがやろうとしていること、特に町の人たちがやろうとしていることの大きな器をつくってあげることがまず大事だなと思っていました」。

市野将行氏@グローバルカフェ

Masayuki Ichino @ global cafe



愛知県津島市出身、1977年生まれの市野氏は、大学卒業後、世界中を旅するバックパッカーをしていた。2014年、倉庫兼社宅だった建物をリノベーションし、「グローバルカフェ」を開業。1Fカフェ・バー、2Fゲストハウスという駅西でもひととき個性のある空間だった。オレンジの会・山田真理子氏が市野氏に声をかけ、市野氏が喫茶店を立ち上げることになった。

「どういう場所にしたいかという、駅西の雰囲気というか、すごく温かい感じで、人の距離が近いというようなものを、本当にここで表現したい。老若男女、何人だろうが、どんな違いを持った人だろうが、特に弱者と言われるような、支えが必要な人たちをこの地域全体で支えて、つながりを持って支えていく。それが商店街の中でもあるし、駅西のエリアということだと思います」。

「その魅力に対して、外から来る人たちが、どんどん喫茶モーニングがハブとなって、次の何かにつながっていく、次の人にどんどんつながっていくというのが僕はずっと人類の歴史の中の役割かなというふうに思っています」。

大きなことを言うと、この喫茶店を通して、世界平和に取り組むつもりでいます。ジョン・レノンが『イマジン』で歌ったみたいなことを本当にここでやりたいというぐらいの意気込みでやるつもりです」。

社会調査実習班@名古屋市立大学

Social research training group @ nagoya city university

勝谷亜子・加藤汐梨・竹田真菜・萩原章太・長谷川和実
藤田桃萌・本田拓弥・松井友奈・保浦楓



名古屋市立大学 人文社会学部 現代社会学科2年生は、社会調査実習というプログラムで、駅西の調査を行っている。彼らもまた、駅西のアクターのひとつである。

「駅西を担うアクターは、実に多様である。日本の高度経済成長を支えてきた自営文化に基づく商店街の店主たちをはじめ、戦後のヤミ市以来街の重要な担い手である在日コリアンの人々、新しく流入してきた中国・ネパール等多様な民族の商いの担い手、アニメ好きのオタクたち、引きこもりの人びと、街で新たにビジネスを仕掛けようとする若者起業家、ふらっと街に飲みにくる人…。この多種多様な人々は、それぞれの文化に誇りを持ち、ときに無関心に、ときに匿名的に、そしてときに刺激し合いながら過ごすことができる。それこそが『インターカルチャーな街』である。

そうした彼らの生き方(カルチャー)は、それを意識して行ってきたのではなく、それぞれの生活を成り立たせていく中で『結果的に』形作られてきたものである。それは駅西という一つのコミュニティの中で『共存』している。一見、社会的には少数派と捉えられるような人びとが生き生きと暮らし、街の重要な構成員となることが、この街の中では当たり前のこととして捉えられている。それぞれの構成員同士の繋がりが『ないように見える』中でも多文化共存の精神は実は存在し確立している」(社会調査実習林班 2019)。

2019.5.1 喫茶モーニング OPEN!!

Kissa morning open!!



2019年5月1日、一日中モーニングサービスを提供する「喫茶モーニング」が開業した。グローバルカフェ・市野氏の「多様性」「持続可能な社会づくり」というテーマ、そして「ここに来る人たち誰でも、受け入れられる」という空間イメージが、そこには込められている。

喫茶モーニングは、オレンジの会の就労施設でもある。うつ病などで家に引きこもっていた人たちが、就労訓練をしているのだ。20～50代の「オレンジの会」利用者の人びとが、毎日2人ずつ就労する。厨房での作業を中心に、個人の適性に応じてホールでの仕事も割り振っている（中日新聞 2019/5/27）。ここはまた、彼ら彼女の「生きられる空間」となっている。

「グローバルカフェ」と「オレンジの会」の想いやミッションを受け継いだこの空間には、毎日、着実に人びとが集ってきている。若い学生たち、子ども連れのママたち、年配の住民の方々、ビジネスマン、多種多様な民族、名古屋を訪れる観光客。この空間は、名古屋のコミュニティ・ハブ（拠点）になれるのだろうか。



2010年代、商店街の遊休不動産を利活用し、身を立てようとする若手起業家たちが現れた。新たな起業家たちは、自らのネットワークを使い、競争率の高い不動産市場のなかで何とか物件を借り、改修し、事業を起こしてきた。そのなかには、自らの店舗の経営を超えて、まちづくりを目指そうとする者もいる。

彼ら彼女らは、駅西の「住みやすさ」を追求し、駅西の「東京化」に対抗しながら、その文化的アイデンティティを防衛しようとしている。しかし、彼ら彼女らはリア開発そのものに反対しているわけではない。むしろ、その再開発の流れのなかで、起業家として身を立てようとしている。

駅西のモザイク的小宇宙



商店街の店主、在日コリアン、アニメ好きのオタクたち、ふらっと街に飲みにくる人。
彼ら彼女が生きてきたその歴史的地層に、またひとつの社会空間が埋め込まれた。
こうして、駅西のモザイク的小宇宙が広がりを見せていく。

これまでのカルチャーと新たな再開発がせめぎ合う社会空間、エキニシ。
そのミライの姿は、まだ誰も知らない。

Profile

林 浩一郎

名古屋市立大学 人文社会学部 准教授
博士(社会学) 首都大学東京
都市社会学・地域社会学



林浩一郎, 2008, 「多摩ニュータウン開発の情景——実験都市の迷走とある生活再建者の苦闘」
『地域社会学会年報』20. (日本都市社会学会若手奨励賞 受賞)

林浩一郎, 2010, 「多摩ニュータウン『農住都市』の構想と現実——最後の開発住区の酪農家と養蚕家の岐路」
『日本都市社会学会年報』28. (地域社会学会奨励賞: 論文部門 受賞)

林浩一郎, 2012, 『多摩ニュータウン開発の構想と現実——都市計画と地域政治の社会学』
首都大学東京人文科学研究科.

別所良美・林浩一郎編, 2017, 『名古屋駅西におけるリノベーションまちづくりの可能性——
「現代の家守」と持続可能な都市と地域社会を考える』.

林浩一郎編, 2018, 『リニア駅上部空間をめぐるパークマネジメント戦略——
名古屋駅西におけるエリアリノベーションの可能性』.

林浩一郎, 2019a, 「「リニア・インパクト」を見据えた稼ぐまちづくり運動の行方——
名古屋駅西側の再編をめぐるエリアリノベーション戦略」『東海社会学会年報』11.

林浩一郎, 2019b, 「リニア開発主義の構造と主体——名古屋駅西地区におけるリノベーション事業と「草の根の新自由主義」」
『日本都市社会学会第37回大会』

本誌は、JSPS科研費「リニア・インパクトを見据えた都市戦略——名古屋駅の再編をめぐるまちづくり体制の構築」および、名古屋市立大学 特別研究奨励費の助成を受けたものである。調査にご協力頂いた関係の皆様、研究過程でご助言いただいた皆様に、心より感謝申し上げます。